

ドストエフスキイの『白痴』とその時代—ロシアの独自性の模索

高橋誠一郎

はじめに—課題と方法

かつて筆者は、比較文明学の創設者の人とされるダニレフスキイとドストエフスキイとの関わりにも言及しながら、主に『罪と罰』にいたるまでのドストエフスキイの西欧文明觀の変遷に焦点を当てることにより、いわゆる「西欧派」的な視点からロシアの改革を目指してクリミア戦争の直前に捕らえられ、シベリア流刑を経て帰還してから西欧的な知識人とロシア的な民衆との相互理解の必要性を認識して、「大地主義」を唱えるようになるまでを考察した¹。

すなわち、クリミア戦争敗戦後の「大改革」の時期にドストエフスキイは、『罪と罰』(1866年)において、自分をナポレオンのような「英雄」と見なし、「悪人」と見なした「高利貸しの老婆」の殺害を正当化した主人公の「非凡人の理論」の考察をとおして、自国中心的な近代西欧の歴史觀の問題点にも鋭く迫っていたのである²。

このような「近代的な〈知〉」の問題は、1868年の1月から12月にかけて『ロシア報知』に連載され、さらに残りの章が翌年の2月に『ロシア報知』の付録として発表された全部で四編から成る次作の長編小説『白痴』でもより深く掘り下げられている。

そしてそれは、1866年に起きたオーストリアとの戦争でプロシアが勝った後で、プロシアとフランスとの間で新たな戦争が勃発する危険性も生まれていたこの当時の西欧社会の状況や、クリミア戦争の敗戦の苦い経験とも深く結びついていた。なぜならば、クリミア戦争(1853～56年)をオスマン帝国に制圧されていた同じスラヴの同胞を救うための十字軍として捉えていた多くのロシアの知識人にとって、イギリスやフランスなどの列強がトルコの側に参戦してロシアに宣戦を布告したことは予想外の出来事だったのである³。

こうして、初めての西欧旅行の後で書かれた『冬に記す夏の印象』(1863年)と同じように、1867年から68年にかけての旅行中にドストエフスキイが観察したことや体験したことは、長編小説『白痴』の構想にも深い影響を及ぼしている。

それゆえ本稿では、『白痴』の構想や執筆段階におけるドストエフスキイの西欧社会の観察や考察を分析することで、比較文明学的な視点から『白痴』におけるロシアの独自性の模索とドストエフスキイの「スラヴ主義」への接近の問題に迫りたい。

1. 『白痴』の構想とユゴー作品の考察

長編小説『罪と罰』を発表した翌年の1867年2月15日にドストエフスキイは、トロイツキイ・イズマイロフスキイ大寺院でアンナ・スニートキナと再婚した。しかしその約2ヵ月後

の4月14日には、債務者からの厳しい取り立てによって債務監獄に収監される危険性が出てきて、それから逃れるために再婚したばかりの妻アンナとともにヨーロッパへと列車で旅立った。

こうして国境を越えたドストエフスキイ夫妻は、4月17日の朝7時にベルリンに着き、翌日は宮殿や建築アカデミー、オペラ劇場、大学、教会などを見物して、19日の早朝6時45分にドレスデンに出発し、昼前に到着すると早速、ドレスデン美術館でホルバインの聖母やラファエロの傑作「聖シストの聖母」を鑑賞した⁴。そして、翌日もここを訪れてティツィアーノの「硬貨を持てるキリスト」やクロード・ロランの「アシスとガラテア」などの絵画を鑑賞している。

そしてグロスマンの記述に従えばドストエフスキイは、『ネートチカ・ネズワーノワ』においても言及していたフランスの画家エミリー・シニョールの絵『罪の女を救すキリスト』だけでなく、ティツィアーノの『懺悔するマグダラのマリヤ』や、「若い女が目ざめた良心の苦しい惑乱に、手をしづり、頭をのけぞらせて道づれの者に拝むようにして助けを求めている」レイスの『マグダラのマリヤの懺悔』など「完璧な人間の清らかな魂によって更生した娼婦の詩的な神話」を描いた一連の絵画を見て深い感銘を受けていた⁵。

これらの絵画がムイシュキンが語るフランス人の番頭に誘惑されて捨てられて、母親や牧師に責められたばかりでなく、村人たちによってのしられたり悪口を言い立てられたイスでのマリイのエピソードや、幼くして両親を火事で亡くしたために隣人の貴族によって育てられその愛人にさせられたナスター・シャ・フィリポヴナの形象にも深く関わっていることは明白だろう。なぜならば、最初は大人たちの道徳に従って、マリイをはやし立てていた子供たちは、ムイシュキンが彼女をかばったことからマリイをいたわるようになっていたのである。

さらに8月12日にはバーゼル博物館で、『白痴』においても重要な役割を演じることになるホルバインの絵画「イエス・キリストの屍」などを見て、8月13日にジュネーヴに到着したドストエフスキイは、ようやく9月中旬に懸案だった「ベリンスキとの交遊」を完成した。

こうしてドストエフスキイは、ヨーロッパの旅行などで得たさまざまの印象を生かして、満を持して『白痴』に取りかかるが、構想はなかなかまとまらず11月中旬に『白痴』の第一稿を破棄して構想をたてなおし、12月に『白痴』の最終プランがまとまった。このような『白痴』の構想についてドストエフスキイは姪のソフィアに宛てた手紙で、「永遠の奇跡」とされるキリストに言及しながら、「この長編の主要な意図は無条件に美しい人間を描くことです」が、「これ以上に困難なことは、この世にありません」とし、「美しきものは理想ではありますか、その理想はわが国のものも、文明ヨーロッパのものも、まだまだ実現されではありません」と書いた⁶。

そして、「キリスト教文学にあらわれた美しい人びと」のなかで、最も完成された主人公としてドン・キホーテを挙げるとともに、飢えに苦しむ幼い甥や姪のために一切のパンを盗んで投獄されたユゴーの『レ・ミゼラブル』の主人公のジャン・ヴァルジャンも「美しい

人」として挙げたドストエフスキイは、「彼が同情を喚起するのは、その怖るべき不幸と彼に対する社会の不正によるのです」とその理由を説明しているのである⁷。

しかも、5月28日には妻のアンナがユゴーの『レ・ミゼラブル』を読んでいるが、その際に「この作品をとても高く評価していて、楽しみながら何度も読み返して」いた夫のドストエフスキイが、「この作品に描かれた人物たちの性格のいろんな面を私に指摘し、説明してくれた」ことを証言している⁸。このようなアンナの記述に従うならば、このときドストエフスキイは主人公だけでなく、薄情な貴族の恋人に身重の身で捨てられ、娘のコゼットを育てるために自分の豊かな髪や歯などを徐々に売って、ついには売春婦にまで身を落とすことになったファンチースの悲劇について妻に語っていたと思われる。

実は最初のヨーロッパ旅行の際にも、出版されたばかりの『レ・ミゼラブル』をフィレンツェで手に入れたことで、街の見学も忘れて読みふけったドストエフスキイは、兄と共に発行していた総合雑誌『時代』の1862年9月号にユゴーの『ノートル=ダム・ド・パリ』のロシア語訳が掲載された際に、次のような序文を書いていたのである。

すなわち、「彼の思想は十九世紀のあらゆる芸術の基本的な思想」と書いたドストエフスキイは、それは「状況や幾世紀にもわたる停滞、社会的偏見の圧迫によって不当に押しつぶされた者、滅亡した者の復興」であり、「この思想は虐げられ、皆にのけ者にされた社会層を正当に光を当てようとしている」と定義しているのである⁹。

さらに、1863年には『レ・ミゼラブル』論を書こうとして、友人にオリジナル版かロシア語に翻訳されたものの一部でもあれば貸して欲しいとの手紙を書いている。これほど熱中して読んだ『レ・ミゼラブル』をドストエフスキイがこの時、持っていたのは不思議に思われるが、この作品については新聞や雑誌で部分的に紹介されてはいたものの、「全体の翻訳出版」は禁止されていた。つい数年前まで政治犯としてシベリアに流刑されていたドストエフスキイが、国境での荷物検査にひっかかるのを恐れて持ち込めなかつたことは十分に納得できるのである。(実際、1867年から1871年にかけての長い外国生活からロシアへと戻る際には、国境で詳しい荷物検査を受けていた)。

そして、1867年の8月16日のマイコフ宛ての手紙で、「ロシアの国民があのようない大改革を迎えて(裁判制度の改革だけを取ってもそうです)。立派な能力をもち、思いがけぬ成熟を見せた」と書いていたドストエフスキイは、10月9日には、ロシアで地主である両親に虐待された14歳のオリガが自宅に放火した事件について、ロシアの陪審員がオリガを無罪とし、両親の方を有罪としたことについて、「わが国の陪審員たちはこれ以上ない判断を示しました」と高く評価した¹⁰。

実際、両親に無罪の判決を下した「裁判官たちには、もう少し教養と実地経験」と「道徳的精神」を望みたいと続けて、彼女を虐待した両親の行動こそが娘の犯罪を生み出したとしてその道義的な責任を強く指摘して、「ロシアへの帰心矢のごとしです。たとえば、ウメツキ一家の事件などについても、ぜひ一言して、発言したいところです」と書いたドストエフスキイは、オリガの犯罪についての深い考察を踏まえて、破滅的なナスター・シャの行動を『白痴』において描いたのである。

こうして検閲の問題などもあり、『レ・ミゼラブル』論は書かれることはなかったが、ファンチースが養育費としてきちんとお金を払っていたにもかかわらず召使いのようにこき使われ、虐待されていた幼いコゼットの物語も描かれていた『レ・ミゼラブル』が、『白痴』の構想にも強い影響を与えたことはたしかだろう。

ここで注目したいのは、ドストエフスキイが近代化には成功したもの、西欧的な知識を持つ貴族と民衆との分裂を招いてしまったピョートル大帝の改革と比較しながら、クリミア戦争の敗北後に行われたアレクサンドル二世の「大改革」をきわめて高く評価していたことである。

なぜならば、ギロチンによるフランスの死刑について、主人公のムイシュキンに「判決文を読みあげて人を殺すことは、強盗の人殺しなんかと比べものにならないくらい怖ろしいことです」と語らせていたドストエフスキイは、西欧の裁判制度と比較しながら、ロシアの裁判制度はすぐれているようですねとムイシュキンに語らせただけでなく、フランスと比較しながら「ロシアでは死刑がない」とも主張させていたのである（1・2）。

これについてアカデミー版の註は、実際にはロシアにも死刑制度はあったので、これは検閲を考慮しての記述であると指摘している¹¹。ただ、長い間外国にいたムイシュキンがロシアの事情にうとかったという設定を考えれば、この発言はロシアを理想化して見ようとした主人公の志向性を示しているだろう。つまり、このような死刑制度の考察は、「文明」の名のもとに自らの「正義」によって人を裁き、「他者」を殺すことを正当化した近代西欧文明への鋭い批判とも深く関わっていたのである。

実は、フランス2月革命後の騒然とした時期に、空想社会主義と揶揄されたフーリエの思想を信奉していた若きドストエフスキイは、農奴の解放やロシアにおける憲法の制定と言論の自由などを求めるペトラシェフスキー事件に連座して捕らえられ、8ヶ月にもおよぶ監獄での訊問のあとで、偽りの死刑判決によって死刑場まで引き出されるという体験をしていた。

その時には刑の執行寸前に「皇帝による恩赦」により生命を救われるという芝居がかった演出がなされた後でシベリアに流刑となったのだが、「死刑の判決を受けてから断頭台にのぼせられる最後の瞬間に至るまで」の精神的苦悶を詳しく描いたユゴーの『死刑囚最後の日』（1829年）をすでにフランス語で読んでいたドストエフスキイは、刑の執行直前に同じく死刑囚だったスペシネフにこの作品の一節を語りかけていたのである¹²。

しかも、クリミア戦争敗戦後の「大改革」の時期の1860年に発行された雑誌『松明』の第3号には、兄ミハイルによるロシア語訳が掲載されていた。この作品を再び読んだ時の感慨がきわめて深かったことは簡単に想像できるのであり、ムイシュキンに死刑の批判を語らせたときにドストエフスキイがこの作品を念頭に置いていたのは確かだろう¹³。

しかも、『冬に記す夏の印象』（1863年）において、ナポレオン三世治下のフランス社会には「すべての者が法の範囲内で何でも行える同一の自由」があることを認めたあとで、「フランス的自由」のもとでは、「百万がない者は、何でも好きなことができる者ではなく、何でも好きなことをされる者である」と厳しく批判していたドストエフスキイは、『罪と罰』の主人公・ラスコーリニコフに暴利を貪る「高利貸し」の非道性を鋭く批判させていた。

そして、さまざまな事業を展開しているエパンチン将軍の秘書を務めていたばかりでなく、株式会社にも勤めていた『白痴』の主要な登場人物のガーニャを、ロスチャイルドのような大富豪になることを目的とする人物として描き出していたドストエフスキイは、ナスターイヤに「いまじゃ人は誰でもお金に眼がくらんで、まるでばかみたいになっているんですからね」と語らせ、「まだまったくの子供みたいな人までが、高利貸しのまねをしているんですからね」と続けさせているのである（1・15）。

つまり、ドストエフスキイは『白痴』において金銭ばかりが重視され、金儲けのためには殺人をも厭わないような傾向をも示し始めたロシア社会を厳しく分析していたばかりでなく、そのような影響をロシアにもたらしていた近代西欧社会の現実をも視野に入れていたのである。

実際、1867年にはパリで万国博覧会が開かれていたにもかかわらず、フランスの輸出は減っており、民間の信用貸し付けは下落していたので、ナポレオン三世によって創設された株式会社は、破産の寸前だったのである¹⁴。

それゆえ、『白痴』の第四編でドストエフスキイは、「法王」が「この地上の王座を掌握して剣をとった」ために、西欧では「何から何までいっさいのものが、金と卑しい地上の権力に代えられてしまった」と主張し、「われわれが守ってきた、彼らの今まで知らなかつたわれわれのキリストを、西欧に対抗して輝かさなくちゃならない」とムイシュキンに主張させたのである（4・7）。

2. 国際情勢とドストエフスキイの西欧観

このようなドストエフスキイの激しい西欧批判の根底には、西欧とロシアとの対立の先鋭化と西欧列強に対する強い危機感があることを見る必要があるだろう。

たとえば、『罪と罰』においてドストエフスキイは、自分が犯した殺人と比較しながら、「なぜ爆弾や、包囲攻撃で人を殺すほうがより高級な形式なんだい」とラスコーリニコフに語らせていたが、オーストリアとの戦争に勝ったプロシアのビスマルクが、ドイツ統一の動きを強めたことに不安を抱いたナポレオン三世は、リュクセンブルグを併合しようとして、プロシアとの間で危うく戦争が起りかけていた。

このような政治状況の変化を受けてスラヴの団結と自立を求める動きがロシアで強まり、スラヴ主義者のポゴーデンは1867年に書いた論文で、「三千万人のスラヴ人がハプスブルク帝国とオスマン帝国の支配下にある」ことを指摘しながら、「ロシア人は道徳的にすべてのスラヴ人を支援し、彼らの言語と教育を守る義務がある」と論じ、また「スラヴ人にとってロシア語の学習が極めて容易であること」を主張していた¹⁵。

そして1867年5月にモスクワで民族学の名の元に開かれた「スラヴ会議」には、これをボイコットしたポーランド人が参加しなかったものの、26名のチェコ人などの西スラヴ民族や、セルビア人など南スラヴ民族47名が参加し、彼らはモスクワだけでなくペテルブルクでも熱烈に歓迎され、皇帝主催や政府高官主催の祝宴や祝典だけでなく、さまざまな講演会や談話会が催された。

それゆえ、この会議に際しペテルブルグで講演したマイコフは、その熱気を伝える手紙をドストエフスキイに書いた。しかしその手紙に対してドストエフスキイは翌年の10月28日まで長い間、沈黙を守っていた。それはロシア国内にいたマイコフとは異なり、ジュネーヴに滞在していたことでドストエフスキイが、さまざまな情報を聞きしたためでもあるだろう。

すなわち、「スラヴ会議」で重要議題として出された「ロシア語のスラヴ共通語化」提案は採択されず、またこの会議に参加したチェコ人の指導者に対する批判も帰国後にはなされていたのである¹⁶。

それゆえ、ドストエフスキイも手紙で「プラハなどでは、まったく西欧的な、ドイツ的、フランス的観点からわれわれを批判し」、ロシアのスラヴ派が「西欧文明の一般に認められている形態を尊重しないということに呆れているようでもあるのです」と批判的に伝えた。そして、「彼らを研究するのは、話が別です。援助ももちろんいいでしょう。しかし同胞づき合いをこちらから求めるべきではありません」と冷ややかに結んでいるのである。

モスクワの「スラヴ会議」に対するドストエフスキイの反応のこのような冷淡さには、「会議」中に起きたロシア皇帝の暗殺未遂事件と、9月にジュネーヴで開かれた「平和大会」の二つの出来事もかかわっていると思われる。

すなわち、プロシアの宰相ビスマルクはドイツ帝国の設立へと動き始めていたが、これに対抗するかのように、1866年からはロシア皇帝を同君とするポーランド王国でも、学校教育や行政機構のロシア化が始まっていた。それゆえ、「スラヴ会議」でもポーランド問題は緊張をはらむテーマであったが、このような政策に対して激しく反発したポーランド人のベレゾフスキが、パリの万国博覧会の開会式に来賓として参加したロシア皇帝のアレクサンドル二世を暗殺しようとする事件が起こったのである。

この報を知ると早速、妻と共にドイツのロシア領事館に駆けつけて、負傷しただけであることを確認していたドストエフスキイは、8月16日付けのマイコフへの手紙で、「パリの事件は恐ろしいほど私を震撼させました。(ポーランド万歳) を叫んだパリの弁護士たちもけっこうなものです」と書いて、この暗殺未遂後にパリの弁護士団がポーランドとベレゾフスキへの同情から街頭に出てデモを行ったことを皮肉っていた。そして、いつまでも「ヨーロッパ文明」を信仰しているロシアの「上流階級」をも批判していたのである。

しかも、軍国主義の拡大に危機感を抱いた平和主義団体は、この年の9月にジュネーヴで「民族の平和と自由の思想」を広めるためとして平和会議を開いたが、そこでロシアの代表として演壇に立ったのが、ドストエフスキイが1862年にロンドンで会っていたミハイル・バクーニンであった。

しかし、プラハやドレスデンの蜂起に参加し、「サクソニヤとオーストリアとロシアでは囚人」となり、二度も死刑宣告を受けながらも、脱出しに成功したことで英雄視されるようになっていたバクーニンは、この演説でロシア帝国を「人間の権利と自由の否定の上に成立している」と糾弾し、「未来のヨーロッパ連邦」を築くために滅亡させることを要求した。バクーニンが行った演説の内容を知ったドストエフスキイは、「いちばん肝心なのは、火と剣だというのです。彼らに言わせれば、あらゆるものが絶滅したあとに初めて平和が訪れるの

だそうです」とイワーノフ宛の手紙で厳しく批判した¹⁷。

そして、ユゴーや国民国家イタリアの建国を願ってパルチザンを組織していたガリバルディなどの積極的な関与によって準備されたこの「平和大会」に疑問を抱いたのは、ドストエフスキイだけではなかった。すなわち、ユゴーは参加が予告されていたにもかかわらず参加せず、また大会の初日に到着して名誉会長に選出されたガリバルディも、大会の終了を待たずして11日にはジュネーヴを去っていた。そしてロシアの西欧派を代表する知識人のゲルツェンも、大会が反ロシア的な傾向を帯びていたために初めから参加しなかったのである¹⁸。

「平和のため」としながらも「火と剣」を要求し、「あらゆるものが絶滅したあとに初めて平和が訪れる」としたバクーニンの主張が、ことにドストエフスキイにきわめて深刻な印象を残したこととは確かだろう。

なぜならば、『罪と罰』において非凡人は「自分の内部で、良心に照らして、血を踏み越える許可を自分に与える」のだと主人公のラスコーリニコフに説明させていたドストエフスキイは、予審判事のポルフィーリイに「もしあなたがもっとほかの理論を考え出したら、それこそ百億倍も見苦しいことをでかしたかもしれませんよ」と批判させていた¹⁹。

そしてドストエフスキイは、『白痴』においてもムイシュキンに「骨の髓まで悪のしみこんだ者でも、…中略…自分の良心に照らして悪いことをしたと考えている」が、自分の思想に基づいて殺人を行った者は、「自分のしたことは悪いことだ」と考えていると指摘させて「良心」理解が誤った思いこみに陥った際の危険性を具体的に示した(3・1)。

それゆえ、1869年の11月にロシアでバクーニンとも深いつきあいのあったネチャーエフによる陰湿な殺人事件が起き、その翌月にはペトラシェフスキイ・サークルの旧友でもあったドゥーロフの死を知ると、グロスマンが指摘しているように、ドストエフスキイは『悪霊』のノートをとりはじめ、「スタヴローギン像の創造」に着手することになるのである。

3. ナポレオン三世の政策と新たな歴史観の模索

このような西欧情勢へのドストエフスキイの関心の中でも、ことに強かったのがナポレオン三世への関心であった。すなわち、ドストエフスキイはすでに自分のシベリア流刑体験を元にした『死の家の記録』(1860年)において囚人のペトロフに、1849年に大統領となったルイ・ナポレオンについて、「あれは一二年に攻めてきたやつ(引用者注——ナポレオン一世)と親戚じゃないかね」と尋ねさせていた²⁰。

そして、『冬に記す夏の印象』の表現を借りれば、フランス二月革命が失敗した後の混乱の時期に、叔父のナポレオン一世の栄光を背景に「まるで天から降ってきたように、この難局からの唯一の逃げ道として」現れた彼は、1852年にはクーデターによって皇帝となっていたのである(VI・59)。

このようなナポレオン三世の方法を強く批判したユゴーは1851年に国外への亡命を余儀なくされていたが、ドストエフスキイは姪のソフィアに宛てた1867年9月29日の手紙で、ナポレオン三世の政策にふれつつ、「空は暗黒にとざされ、ナポレオンは、自国の地平線上に黒点をすでに認めたと言明しました」と記し、プロシアとの関係やガリバルディの義勇軍によ

ってフランス軍の占領下にあったローマ教皇領が急襲された問題などとともに、メキシコ問題をも挙げている。

すなわち、1861年にメキシコへの出兵を行っていたことについてドストエフスキイはすでに『冬に記す夏の印象』で、フランスのブルジョアは「どうして、メキシコ遠征にひとことも異議を唱えようとしないのだろう」と鋭い疑問を記していたが、ナポレオン三世は1864年にはオーストリア皇帝の弟マクシミリアン大公をメキシコ皇帝に就けるなどの干渉を行っていた。

そしてこうした軍事行動が失敗し、栄光にかけりが見え始めたナポレオン三世は、1865年に大著『ジュリアス・シーザー伝』を著し、その「序文」において「私が人類に対してなさんとした善が実現されるためには、これからまだどれほどの戦闘、血、そして年月が必要であることか！」というナポレオンの言葉を引用して、自分こそが彼の後継者であることを強調した²¹。

しかし、平等という理念に代わって、「月並な人間」に対する「天才」の支配の必然性を説き、戦争という手段を正当化したこの「序文」は、西欧各国と同様にロシアでもすぐに翻訳されて激しい論議を呼び起こした。そして、このナポレオン三世の考えは1866年に出版された『罪と罰』の「非凡人の理論」にも強く反映することになったのである。

それゆえ私たちにとって興味深いのは、ドストエフスキイがソフィアへの先の手紙でナポレオン三世としては、「戦争によって民心をわきにそらせ、軍事的成功という古い手でフランス国民の機嫌をとり結ぶ必要があるのです」と説明していることである。

なぜなら、ダニレフスキイも1868年に書き上げた『ロシアとヨーロッパ—スラヴ世界のゲルマン・ローマ世界にたいする文化的および政治的諸関係の概観』の第1章で、クリミア戦争（1853～56年）がどうして勃発したのかを問題とし、この戦争は1852年に即位したナポレオン三世が国内の歓心を得るためにそれまでギリシア正教徒に与えられていた聖地エルサレムにおける特権をカトリック教徒に譲るようにトルコに要求したことが原因であると指摘することになるのである²²。

さらに、ドストエフスキイは『地下室の手記』（1864年）において、主人公にヨーロッパの強国であるプロイセンとオーストリアが小国デンマークに攻め込んだ1864年の戦争に言及させながら、『イギリス文明史』を書いたイギリスの歴史家バッклによれば「人間は文明によって穏和になり、したがって残虐さを減じて戦争もしなくなる」などと説かれているが、実際にはナポレオン一世や三世のもとや南北戦争では「血は川をなして流れている」ではないかと鋭く問い合わせていた（VI・110）。

一方、ダニレフスキイも「序論に代えて」と題されたこの書の序章で、1864年の「シュレーズヴィヒ・ホルシュタイン」をめぐる戦争に際しては、プロイセンとオーストリアが1852年のロンドン議定書に反する行動をとったのに対して、西欧の諸国が強く抗議をしなかったことを問題としていたのである（3～9頁）。

そして、ダニレフスキイは「なぜヨーロッパはロシアを憎むのか」と題された第2章では、ポーランドの分割や1848年の2月革命に関連して起きたハンガリーの鎮圧の際に、オースト

リアやプロシアなども関わっていたにもかかわらず、ロシアのみがその反動性を強く非難されていると力説し、ロシアに関わる問題では不公平な「二重基準」が用いられるのは、ヨーロッパがギリシア正教を受容したロシアを自分たちの同胞と見なしていないからだと強調していた。

それゆえ、雑誌『曙』に掲載されたこの最初の数章を読んだ後でドストエフスキイが、1869年3月18日のストラーホフへの手紙で「私自身の結論や信条と実にぴったり一致していて、あるところなど結論の類似に驚かされるほどです」と書いているように、このような見方は多くの点でクリミア戦争以降にドストエフスキイが抱いた西欧観と重なるものであった。しかも、1868年の3月20日へのマイコフ宛の手紙でドストエフスキイは、健康も思わしくないといわれるナポレオン三世が、なんのために「軍隊を補強して、自分自身にとってこんな危機的なときに、自国民にとっても不快な冒險をあえてしたのでしょうか？」と書いている。

実際、1870年から71年にかけて行われることになる普仏戦争への準備は、フランス・プロシア両国において1866年から始められており、鹿島茂氏によれば1868年12月にナポレオン三世は、ニエル元帥に軍拡計画の作成を命じ、現役と予備役の他さらに40万の国民遊撃隊を創設するように指示していたのである²³。

この意味で興味深いのは、『罪と罰』においてナポレオン一世のような「非凡人」にあこがれたラスコーリニコフの悲劇を描いたドストエフスキイが、目的のためには手段を選ばないと考える秘書のガーニヤが「ナポレオン式の小さな頸ひげ」をたくわえていたと記していることである（1・2）。ガーニヤのような「世間並み」の人物が、「独創的な人間であることを欲するあまり」、「下劣な行為をあえてすることさえある」と記されていることに注目するならば（4・1）、『白痴』におけるガーニヤの形象も、ナポレオン三世のような生き方にあこがれた若者として描かれていた可能性が強いように思われる。

結語

ダニレフスキイの『ロシアとヨーロッパ』をドストエフスキイは、「すべてのロシア人の未来の座右の書となるでしょう」と絶賛した。実際、「火薬、印刷、羅針盤、紙」などは、「恐らく中国からヨーロッパに渡來したのであろう」と指摘して、西欧文明のみを「進歩」とし、アジアを「停滞」と規定する文明史観の非を説いたダニレフスキイは、「文化・歴史類型」によって文明を分類する新しい歴史観を提唱していた（51～62頁）。

しかし、その一方でダニレフスキイは、社会ダーウィニズムにも言及しながら「弱肉強食の論理」に従って「他国」を侵略することを正当化する西欧列強に滅ぼされないためには、近代化に成功して1812年の「祖国戦争」でナポレオン一世が率いる大陸軍を打ち破ったロシア帝国を盟主とする「全スラヴ同盟」を結成することが必要だと結論していた。

実際、選挙で選ばれた後にクーデターによって皇帝になったナポレオン三世を研究者の勝田吉太郎はヒトラーの「先駆者」と位置づけているが、軍事力によって自国の主張を通そうとしたナポレオン三世の手法に強い恐怖を覚えた他の諸国も軍事力の拡大に邁進することになったのである²⁴。

一方、ドストエフスキイは『罪と罰』のエピローグで旋毛虫に犯されて自分だけが真理を知っていると思いこんだ人々が互いに殺しあって、ついに人類が滅亡するというラスコーリニコフの見た悪夢を描いて、戦争という手段で「他者」を殺すことを根底から批判していた。そして『白痴』の主人公のムイシュキンも、西欧社会によって「遅れている」と見なされているロシアの方が、「殺すなけれ」とした「キリストの理念」をより保持していると主張していたのである。

それにもかかわらずドストエフスキイは、露土戦争（1877～78年）の頃になるとモノローグ的な形で自説を述べる論文的な形式で書いた『作家の日記』において、バルカン半島で苦しむ同じギリシア正教系の宗教を信じるスラヴの同胞を救うためにロシアが行う戦争を「正義の戦争」として讃美することになる。

このような記述は、「殺すこと」の問題をより深く掘り下げた長編小説における考察とは反するようにみえるが、それはポリフォニー（多声的）な形で問題を考察している小説と論文との形式的な違いや検閲を意識したことによるだけではなく、西欧列強は自分に対抗できるような強力な文明が出てくるとそれを「滅ぼそう」としてきたと主張したダニレフスキイの歴史観からの影響が強いように思われる。

しかしこの問題は、『白痴』論の範囲を超えるので、いずれ稿を改めて考えることにしたい。（なお、本文における人名や国名の表記は統一した）。

注

*1 高橋「ヨーロッパ『近代』への危機意識の深化（1）」『比較文明学の理論と方法』『講座比較文明』第1巻、朝倉書店、1999年。

*2 高橋『「罪と罰」を読む（新版）——〈知〉の危機とドストエフスキイ』刀水書房、2000年参照。

*3 高橋『欧化と国粹——日露の「文明開化」とドストエフスキイ』刀水書房、2002年、35～40頁

*4 Летопись жизни и творчества Ф.М. Достоевского. Т.2. (1865-1874), СПб. изд. Академический проект, 1994, С.115.（なお、本稿は露暦で統一するが、新暦にするためには12日を足せばよい）。

*5 グロスマン『ドストエフスキイ』北垣信行訳、筑摩書房、1966年、286～7頁。

*6 ムイシュキンの形象については、高橋「長編小説『白痴』における「本当に美しい人間」の探求——ムイシュキンの形象をめぐって」、『東海大学紀要外国語教育センター』第29輯、2008年参照。

*7 Достоевский Ф.М. Полн.собр.соч.:В 30 т.Л.,Наука. Т.28.К н.2.С.251.訳は木村浩訳の『白痴』（新潮文庫）の「あとがき」より引用した。（以下、『白痴』からの引用は木村訳により、引用箇所は本文中の括弧内に編と章をアラビア数字で示す）。

*8 アンナ・ドストエフスキヤ、木下豊房訳、『アンナの日記』、河出書房新書、1979年、95頁。

- *9 井桁貞義、「『レ・ミゼラブル』『罪と罰』『破戒』」「ドストエフスキイ 言葉の生命」、群像社、2003年、390頁より引用。
- *10 ドストエフスキイ、江川卓訳、『書簡III』(『ドストエフスキイ全集』第22巻)、新潮社、1979年、159頁。(以下、手紙については日付のみ記す)。
- *11 Достоевский Ф.М. Полн.собр.соч.:В 30 т.Л.,Наука. Т.9.С.429.
- *12 ベリチコフ編、中村健之介編訳『ドストエフスキイ裁判』、北海道大学図書刊行会、1993年、362頁。
- *13 Достоевский Ф.М. Полн.собр.соч.:В 30 т.Л.,Наука. Т.9.С.430.
- *14 Достоевский Ф.М. Полн.собр.соч.:В 30 т.Л.,Наука.Т.28.К н.2.С.251.С.473.
- *15 ディヤコフ、早坂真理・加藤史朗訳『スラヴ世界—革命前ロシアの社会思想史から』彩流社、1996年、231～233頁。
- *16 川村清夫『プラハとモスクワのスラヴ会議』中央公論事業出版、2008年、164～5頁、175～185頁。
- *17 グロスマン、前掲訳書、299～302頁。
- *18 Достоевский Ф.М. Полн.собр.соч.:В 30 т.Л.,Наука. Т.28.К н.2.С.452-4.
- *19 Такахаси С. Проблема совести в романе «Преступление и наказание»// Достоевский: Материалы и исследования.Л., Наука,1988. Т.10.С.56-62.
- *20 ドストエフスキイ、工藤精一郎訳、『死の家の記録』、『ドストエフスキイ全集』第5巻、新潮社、1979年、105頁。以下、『地下室の手記』などの引用は、この全集の巻数と頁を本文中の括弧内にローマ数字とアラビア数字で示す)。
- *21 井桁貞義「ドストエフスキイとナポレオン」、前掲書、206～208頁。
- *22 Данилевский,Н.Я. Россия и Европа. СПб.,изд.Глагол и изд.С.-Петербургского университета, 1995,С.10-16.
- *23 鹿島茂、『怪帝ナポレオン三世 第二帝政全史』、講談社、2004年、421頁。
- *24 勝田吉太郎『近代ロシヤ政治思想史—西欧主義とスラヴ主義』創文社、1961年、816頁。